
最強幼女の世界調律

赤眼鏡の白チョーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強幼女の世界調律

【Nコード】

N8673Y

【作者名】

赤眼鏡の白チヨーク

【あらすじ】

それは小さな少女だった。人間と魔を宿す魔人が住む世界で、魔人最強の魔力を持つのは幼女だった……人間の大陸で用心棒をする男と、魔人の大陸で強さ故に隔離された生活をする幼女が出会う時、世界はゆっくり動き出す。更新遅めですご了承ください><

約束

「…お前は どうしたい」

「え…？」

ぼろぼろと目から涙を零したイリシアは、顔を上げてわからないという顔をした。

だから、言う。

伝えなければならぬことを。込み上がってきた吐き気を飲み込み、声を出して。

「お前は、どうしたいんだ」

イリシアは言葉を理解したが、戸惑うように目を反らした。脇腹から漏れだしている血を手で押さえ、答えを待つ。

「言っ ていいんだ」

優しく声をかけると、肩をびくつと動かし、ゆっくりと俺を見た。

その小さな体で抱え込んできた過去を知っているから、我が儘を言っ て欲しいと願う。

「……………っ」

両手を強く握って、決心したように。

口を開けて。声を張り上げて。

「私は、私は！」

叫んだ。

「私は戦争を止めたいです…っ！」

「…わかった」

立ち上がった体は軋みをあげたが、無視をする。

震える小さな存在を守るために、歩き出す。

「…あ」

「俺が止める」

すれ違う時に頭を撫でると、嬉しそうに頬を緩めた。

立ち向かう先には、五千の敵味方入り乱れる戦場が。
立ち向かうのは、小さな少女と男が一人。

最強少女の世界調律

理由とは

「これでよし、と！」

縄に巻かれた三人の男達の前で俺の姉、アデイは仁王立ちした。

「もううちの畑を荒らすのは、やめてもらおうか？」

「何で人間の言うことを聞かなきゃならねえんだよ！」

「解けクソ女！」

アデイの言葉に唾を吐いて反論している奴らは、隣の領土に住む魔人だ。一人一人に人間にはない角や鱗がある。

よくこの魔人達は、アデイの畑の作物を盗んでいた。

「……よし」

俺の姉は笑いながら三人に、げんこつを叩き込んだ。

骨がぶつかったような強烈な音がした後に、小さく震えながら痛がっている。

「最近の魔人は困ったものね」

同意を求めるように振り返った姿に向かって頷き返す。

長年の付き合いで逆らわない方がいいことはわかっている。

「この人間が……！」

「あのねえ……人間よりも力が強いからって、何をしてもいいってわけじゃないの！人の物を取っちゃ駄目って習わなかったの？」

「誰がためえの言うことを聞くかっての」

「ぶっ殺すぞ！」

「……ぶっ殺返してやろうか」

アデイのオーラを察知して魔人達は静かになった。

「……もう我慢ならない！こうなったら魔王さんに直接抗議してやるわ！」

「姉さん、危険だ」

「大丈夫よ、魔人の国に行くのはあんただから」

「……………」

「行ってらっしゃい！」

笑顔のアディに送られて、俺はため息混じりにこれからの事を考えた。

旅の友

「すまん、そこを避けてくれないか」

三日かけて人間の地から魔人達が住む領土に移ったまではよかったのだが、魔王の城に続く森を進む度に魔人達が立ち塞いでくるのは疲れてきていた。

そんなに警戒心を持ってこられても、逆に困るのだが。

「ニンゲンが何の用だ!」

「食べちゃうぞ!」

背丈が俺よりも大きい二人の青年なのだが、手を広げ通せん坊をしている姿は子供である。

「魔王に用があつて会いに行きたい」

「魔王様に会うなんてニンゲンがしていいわけないだろ!」

「何で魔王様に会いたいんだ?」

右にいる犬の耳を持つ赤髪の魔人が睨みつけて来るのに対し、左に立つ羊の角を持つ青髪の魔人は首を傾げて俺を見つめてきた。

「俺の姉が魔人に畑を荒らされて困っているのを伝えたい」

「ガジユウ君、聞いた? そんな嫌な奴いるんだね」

「……チアルお前何言つてんだ」

「え、何の事?」

「俺達も魔人だろ!」

「そつか、そつだよ。僕たち魔人の事で困ってる人を放って置けないよね!」

「……は?」

「案内します。えーと……」

「レダだ」

「レダ君かー。僕チアル。ワンコなのがガジユウ君だよ。あ、道はこっちだよ」

「助かる」

「……俺の話聞いてー!!」

少女の閑話

長い廊下を歩いて来る音が響いてきた。

少女は大丈夫、と呟いて震える手をテーブルの下に隠した。

「やあ、イリスア。私の可愛い可愛い妹よ、ご機嫌はいかがかな？」

「…アロウ兄様」

「随分髪も伸びて…もっと綺麗な髪飾りをつければいいものを」

部屋に入ってきたのは、若めで整った顔をした男だった。

ただやや混じっている白髪をかなり気にしながら、自分の髪を触り続けている。

「アロウ兄様、」

「嘘をついたね」

「……！」

「嘆かわしいね…イリスア。私に嘘をつくとは。東にある村を壊せと誰が言ったんだい？」

「だって、」

「私はすべてを殲滅しろと言ったんだ」

男は目の前のテーブルを強く叩くと少女の顔を覗き込んだ。

顔は笑っているが、その目は笑っていない。

「……無理です」

「ふはは、不思議な事を言うな？無理？何故だイリスア」

「……無理ですっ！」

「勘違いするな！誰にも見向きもされないお前の世話をしていると思っっているんだ！」

「ひっ！」

大声をだした男に驚き、少女は肩を寄せて涙を浮かべる。

「イリスア。イリスア？………今度はないからな？」

笑みを浮かべた男は、体を翻してゆっくりと振り返った。

少女は怯えながらも瞳に男を写す。

「殺人兵器になりたくなければな」
笑いながら去る男がいなくなると、
テーブルの下に隠し続けた手を
強く握りしめて。

少女は逃避するように目を閉じた。

小さく、助けてと呟いて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8673y/>

最強幼女の世界調律

2012年1月4日00時50分発行